

# 本文章已註冊DOI數位物件識別碼

- ▶ 近代化に向けてのエートス変動について—非西洋後発社会  
日本の近代化をどう捉えるか—

doi:10.29714/TKJJ.200003.0010

淡江日本論叢, (9), 2000

作者/Author：馬耀輝

頁數/Page：185-191

出版日期/Publication Date：2000/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200003.0010>



*DOI Enhanced*

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，  
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，  
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



# 近代化に向けてのエートス変動について

—非西洋後発社会日本の近代化をどう捉えるか—

日本語学科 アシスタント・プロフェッサー

馬耀輝

はじめに

板垣退助ら八名が左院に民撰議院設立建白書を提出したその年、明治七年（1874）十月、福沢諭吉はイギリス留学中の馬場辰猪を宛に書いた手紙の中に、「方今日本にて兵乱既に治りたれどもマインドの騒動は今尚止まず」<sup>(1)</sup> という文言がある。

ペリー来航以降強まってきた西洋文明の探求・導入の傾向という文脈から考えると、福沢の目に映った「マインドの騒動」は言うまでもなく、西洋思想の影響がもたらしたものであった。しかも、彼はその「マインドの騒動」の行方を「此後も益持続すべきの勢あり」というように読んでいる。つまり、西洋思想の影響力は当分勢いを保ち続けるということである。

手紙には、「古今未曾有の此好機会に乗じ、旧習の惑濁を一掃して新しきエレメントを誘導し、民心の改革をいたし度」という続きの部分がある。要するに、福沢は、この思想の激動期を新旧思想の組替え作業を行う好機と捉え、人々の思想変革に自ら任じようという意欲を示している。事実、彼を始めとする指導的な啓蒙思想家たちはその役目を担っており、政府側も文明開化を政策に採用し推進していた。

しかし、彼らはなぜ思想の変革を重視していたのか。例えば「文明論とは人の精神発達の議論なり」、「文明とは結局、人の智徳の進歩と云て可なり」<sup>(2)</sup> という福沢の言葉のように、文明化の発展に精神面や智徳面の改革と進歩が重要かつ必要だ、というような共通認識があったからであろう。言い換えれば、欧米の文明化諸国と伍するための近代化実現の前提条件として、「民心の改革」や「人の精神発達」、「人の智徳の進歩」などは近代化の担い手たちの念頭にあったに違いない。

確かに、戦後アメリカの近代化実証研究の結果として、近代化の達成は人間の精神<sup>spirit</sup>、つまり <sup>thinking</sup> 思想・<sup>feeling</sup> 感情・<sup>acting</sup> 行動の面において変革があった時にのみ始めて可能となる、という見解が出されている。<sup>(3)</sup> しかし、われわれは、「人の精神発達」とか、「人の智徳の進歩」をいかに理解したら

(1) 慶応義塾『福沢諭吉全集』第17巻（岩波書店、昭和45年）175頁参照。

(2) 「文明論之概略」前掲書第4巻、3頁と41頁参照。

(3) Alex Inkeles の「The Modernization of Man」Myron Weiner 編『Modernization-The Dynamics of Growth』（Basic Books, Inc. 1966）140頁参照。

よいか。筆者なりの視点から見れば、近代化の担い手たちは人々の精神面や智徳面の改革と進歩を通じて近代化の達成に協力する人々の近代化に向けてのエートスを形成しようとしたのではなかろうか。本稿は即ち、彼らの思想内容や「マインドの騒動」の帰趨など、日本近代思想史の流れをエートスの変動という観点から捉え直すための問題提起を提示しようとするものである。

まず、エートスとは何か、また、エートスの変動という観点から見る場合の近代化とは何かについて論を進めていこう。

## 一、エートスと近代化

### 1. エートスとは

エートスという言葉は一般に「倫理」と訳されることが多いが、もともとギリシア語だったこの言葉は、他と区別される個人や集団の「特有の雰囲気」や「性格」、「慣習」、「習俗」という意味のものとして用いられてきたという。<sup>(4)</sup>しかし、現在の多くの人々は倫理という言葉を目にすると、人間の自由を拘束する、規範的・権威的な性格を帯びるものとしてとらえがちである。その理由は定かではないが、倫理の語源からも伺えるように、どうやら人々のエートスに対する見解は一面的なものであり、そういった性格を強調しすぎたようである。

と言えるのも、エートスの生成面よりなされた探究はすでにあつたからである。例えば、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』はその代表的なものである。彼によれば、近代欧米の経済発展はキリスト文化圏におけるプロテスタンティズムの倫理が資本主義の精神となって、それを可能にしたという。つまり、欲望を抑えて自分の天職に献身的に奉仕するという人間行為のエートスと人間社会（とりわけ経済生活）の進展との関連性は、彼によって明らかにされたのである。

さらに、「生成の倫理」という倫理観を提出した、日本民衆倫理思想史の研究者布川清司はヴェーバーのエートス観を、「エートス（倫理）は人々のうちにやどり、人々をその内面から一定の方向に推し進める現実的な意欲ないし力であり、しかもそれはある特定の多くの人々が共有するところから、社会生活の仕組みを変えるもの、つまり、望ましい社会や新しい歴史を形成する力でもあつたのである」<sup>(5)</sup>、というように把握している。そのヴェーバーにならい、彼は倫理を

<sup>(4)</sup> 堀田彰、片木清編著『現代倫理学』（法律文化社、1990年）1頁参照。

<sup>(5)</sup> 布川清司『江戸時代の民衆思想』（三一書房、1995年）15頁。なお、「生成の倫理」

歴史形成の重要な要因として考えたいと言っている。

つまり、エートスは、人間の内面からその行為を通じて人間生活を望ましい方向に推し進めるという生成的な側面を持ち、また多くの人々が共有することによって、歴史の形成や社会の変動を促すほど大きな力を有するものとして考えられている。では、このような視点から近代化という歴史・社会の大きな変動にアプローチする時、とりわけ筆者の研究関心である日本・中国といった非西洋後発諸社会の近代化について考察する時、近代化とは何かであろうか。

## 2. 近代化とは

近代化の起動力は当該社会の内部において自生した場合の内生因<sup>(6)</sup>にあったという意味からすれば、近代化の起動力としてのエートスは非西洋後発社会の内部においては自生していなかったため、非西洋後発社会は近代化の達成を可能にするには、近代化に向けての行為の目的選択や意志、動機の拠り所であるエートスを外部から取り入れなければならない、ということになる。

もし、近代化とは「近代的なものへの発展過程」であり、非西洋後発社会にとっての近代化とは「西洋近代からの文化伝播に始まる自国の伝統文化の作り替えの過程である」<sup>(7)</sup>という近代化の定義にならって、上のことを別の言い方で言い換えれば、即ち、非西洋後発社会にとっての近代化とは、西洋近代からの文化伝播による近代的なエートスの受容の過程であり、一方、固有のものもあるため、固有のエートスの作り替えの過程でもある、と言うことができるであろう。

エートスは、当該社会の内部において自生したものか、あるいは外部から受容したものか、固有のそれを作り替えたものかのいずれにせよ、その最初の意味から、またヴェーバー・布川のエートス観からもわかるように、つまり、社会通念として広まり、多くの人々によって共有されたものでなければ、生成・規範の力を伴うことができない。とりわけ非西洋後発社会の近代化は一人、二人の仕事ではなく、当該社会の成員多数の参加なしに実現し難い大変革事業であるため、そういった前提条件はなおさら重要なものとして満たされなければならない。

このように考えてくると、非西洋後発社会の近代においては、一体、近代化に向けてのいかなるエートスがどのように社会通念として広まっていった、多くの人々の共有するものとなって、

---

に関する詳しい説明は、氏の著書『近世日本の民衆倫理思想』（弘文堂、昭和48年）の序説を参照されたい。

(6) 内生因とその対義語の外生因についての説明は、富永健一の『近代化の理論—近代化における西洋と東洋』（講談社、1996年）の第24章を見よ。

(7) 富永健一『日本の近代化と社会変動』（講談社、1990年）27～40頁参照。

歴史の形成や社会の変動を促すほどの大きな力を持つようになったかは、研究の課題となる。以下はこの研究課題に対して、「価値生成」論の諸論説<sup>(8)</sup>を踏まえつつ、エートス変動・形成の諸条件を筆者なりに考え、新たな問題提起としたい。

## 二、エートス変動・形成の諸条件

### 1. 固有のエートスとは

まず、問題となるのは、固有のエートスとは何かである。そして、西洋思想の移入によって固有のエートスは消え失せたのか、作り替えられたのか、あるいは消滅せずに、逆に根強く影響力を持ち続けたのか。その原因はどこにあったのか。

### 2. 国際環境の影響

幕末・維新期の日本は言うまでもなく、欧米列強の東アジア進出という国際環境の中にあつた。こうした列強勢力の東漸を前提としながら、日本は鎖国から開国への時代に入った。それに伴い、西洋に接する機会が増え、多くの使節・留学生は諸藩或いは幕府、明治政府に派遣され、西洋文明を身近に体験することができた。それによって、彼らには思想の変化があつたことは紛れもない事実である。<sup>(9)</sup>問題は、国際環境の影響下にあつて、西洋思想のいかなるものが紹介・移入されたのかである。

### 3. 国内環境の変化

社会諸科学において共通する一種の方法論的仮説として、社会生活の一切の意識・思想活

---

<sup>(8)</sup> 「価値生成」(enactment of values)の理論史的源流はマックス・ヴェーバーに遡ることができ、その理論的系譜に属する主な学者たちとして、Daniel Lerner、David C. McClelland、Everett E. Hagen、Alex Inkelesの名前が挙げられている。詳しくは扈建国の『国家発展理論—兼論台湾発展経験』(巨流図書公司、1993年)49~51、84~94、103~108頁参照。

<sup>(9)</sup> 馬耀輝「日本近代化的思想形成與異文化接触—以幕末・明治初年の欧米考察為中心」『跨文化交際與外語教学—第三届海峽兩岸外語教學研討會論文集』(百花文芸出版社、1999年)

動は、当該社会の諸環境や諸条件のあり方によって影響されたり、制約されたりしている、<sup>(10)</sup>とされている。この仮説に従えば、国際環境の変化は勿論、幕末・維新期の政治・社会全般の構造変動は、思想活動に影響を与えた、ということになる。とりわけ国家や政府、軍隊などの諸要素<sup>(11)</sup>は一体、幕末・維新期のエートスの変動・形成にどのような影響や制約を与えたか。究明すべき問題である。

#### 4. 思想移入と伝播の先駆者・担い手たち

幕末期の洋学者・洋行体験者の多くは維新期に入ると、人民の啓蒙という立場から、西洋思想の移入・伝播に努めていた。しかし、彼らはいかなる人物だったのか。彼らによって紹介されたのはいかなるものであったのか。その中に含まれる近代的なエートスは定着したか否か。その原因はまたどこにあったのか。結果として、いかなるエートスが最大公約数的なものとなり、近代化の実現にどのような影響をもたらしたのか。

#### 5. 近代化推進指導者の登場

明治政権の成立で権力を獲得し、近代化政策を考案・実行する指導的な立場にいたのは、いかなる人たちであろうか。彼らの政治思考やその所産である国家像、政策構想などはどのような内容のものであったのか、そして、近代化に向けてのエートス形成にどのように関わっていたのか。

さらに、彼らの「上から」の近代化政策は社会集団・諸階層と衝突し、それに伴う不満が爆発し、抗争が拡大するというような事態を引き起こしたか。また、それは相異なったエートスの相克によるものであったのか。

#### 6. 伝播媒体の登場と媒体接触

エートスは、多くの人々に共有されるものにならなければならないという以上、それがいか

---

<sup>(10)</sup> 前掲書『現代倫理学』19頁参照。

<sup>(11)</sup> 前掲「The Modernization of Man」の148、149頁によれば、近代的または伝統的な価値観の拡大・強化に、国家とその政府や政党とその活動、軍隊、国会などの発展が影響を及ぼすという。

に可能なことになったかは重要な問題である。そこで、新しい価値観と行動基準を提供する<sup>(12)</sup>とされる新聞・雑誌など新たに誕生した媒体は、利用されれば利用されるほど人々の思考様式と価値観もともに変化する<sup>(13)</sup>とすれば、一体どのような思想的影響を及ぼしたかは、明らかにされるべき問題点となるであろう。

## 7. 都市環境の形成

人々の生活態度や価値観、行動様式の転換に影響を与える諸要素の一つとして、都市環境も注目されている。都市環境は多様な生活様式や広範囲の観念と意見の交流、便利な移動、複雑な資源を提供している、と考えられる。<sup>(14)</sup> 一体、近代化過程における日本の都市は、エートスの変動と形成という点において、いかなる役割を果たしたのか。

## 8. 近代的工場の増加

近代的工場もまた、人々の生活態度や価値観、行動様式の転換に影響を与える諸要素の一つとされる。<sup>(15)</sup> つまり、近代的工場の組織と作業方式に具体化された基本原則は、模範作りや一般化、例証、賞罰のプロセスを通して従業員たちの中に定着させられることによって、従業員たちの態度及び価値観、行動はますます近代的になる、ということが指摘されている。<sup>(16)</sup> この観点から考えると、近代的企業・工場の増加は果たしてエートスの変動と形成に繋がったのか、という疑問が生じてくる。

## 9. 思想の受け皿の形成

---

<sup>(12)</sup> 前掲「The Modernization of Man」の147、148頁では、近代的または伝統的な価値観の拡大・強化に影響を及ぼす要素の一つとして、マスコミもあげられている。Inkelesの別の著書（David H. Smith と共著）『Becoming Modern-Individual Change in Six Developing Counties』（Harvard University Press, 1974）の152頁では、マスコミの役割に関して、「新しい観念の扉を開く」、「多様な意見を示す」ということが指摘されている。

<sup>(13)</sup> Ithiel de Sola Pool 「Communications and Development」前掲『Modernization-The Dynamics of Growth』98、99頁参照。

<sup>(14)</sup> 前掲「The Modernization of Man」147頁参照。

<sup>(15)</sup> 前掲「The Modernization of Man」149頁参照。

<sup>(16)</sup> 前掲『Becoming Modern-Individual Change in Six Developing Counties』11章参照。

airiti

エートスをいかに多くの人々に共有させるかを考察する際、もう一つ見逃せないのは、人々の態度・価値観を近代的なものにする最もパワフルな要素<sup>(17)</sup>と言われる、教育であろう。識字率を高めることは教育の本来有する役割の一つであるが、それ自体は思想を受け入れるための基盤形成と拡大に繋がる前提条件でもある。このように考えると、近代日本の教育は、識字率の上昇とともに、いかなるエートスの形成を目標にして施行されたのか、また、固有のエートスの作り替えと新しいエートスの受容という点において、いかなる役割を果たしたのか、などの問題も改めて検討される必要がある。

## 結び

近代化というのは、政治や経済などある領域に限って起こる事象ではないと認めうるなら、これを学問的に探究するには、総合的に捉える視点が必要となる。本稿は即ち、欧米先進国を後から追いかける非西洋後発社会の近代化を捉える際の総合的な視点として、近代化に向けてのエートスの変動と形成を提示し、その理論的根拠を説明し、さらにそのような視点から見る場合に注目すべき諸問題を提起した、いわば研究課題に深く入っていくための準備作業である。

なお、前述した諸点は今までの近代化研究の成果を踏まえて得たもの、あるいは筆者なりに考え出したものであり、日本の近代化を研究する時の着眼点にしようとするものである。今の段階では、どれも未だに仮説的なものに過ぎないが、歴史事実に照らしての具体的な検証は後日に譲るとすることを改めて断っておこう。

---

<sup>(17)</sup> 前掲「The Modernization of Man」146、147頁参照。なお、前掲『Becoming Modern-Individual Change in Six Developing Counties』によれば、学校はカリキュラムの外、賞罰と模範作り、例証、一般化というプロセスを通して近代的な態度・価値観を教え込む、という。(140頁参照)